

# 明日を生きる

萱原 威

当時： 六才のとき広島市郊外で被爆

現在： 広島県呉市広町 広高等学校勤務

## 敵を間違うな

私は数学の教師である。教科指導と同様に、あるいはそれ以上に現在平和教育に力を入れている。

それには大きな理由がある。私は原爆で九死に一生を得た。

私の体験は自分だけの体験にとどまるものではないし、将来の日本の歩む道と深いかわりを持っている。再び戦争をくり返さないために、私の生涯は戦争を原爆を告発しつつ平和を築くことになるだろう。

その私を痛烈に非難する人がいる。数年前のことだが、多くの年賀状のなかに灰のようなものがあつた。『平和教育の名の反米教育がはやってるようです。どの国とも、手は誰とでも仲よくしようというのが平和かと思えますけど。君も変わったらしいねえ。世が痛む思いがするのです。』

サウリと読めば何でもない。 たんに一枚のハガキにすぎない。

たいしたことは書いてないように見える。ところがその差出人は 私のいる学校の以前の校長なのである。 読みすぎるわけにはいかない！

『反米教育がはやってる』などとは何たる愚劣さであろうか。

文面によれば、私が平和教育のもとに反米教育をしていることになる。

だが、それは果して何を根拠にしているのか。

『どの国とも、また、だれとも仲よくしよう。』という、それはいい。

だが、第二次世界大戦において、人類に対して核を使用したのはアメリカであり、

核兵器使用が国際法上違法であったことは原爆裁判でも明らかである。

トルーマンの命令Fに広島・長崎に原爆が投下されたことは事実であり、この反人道的な残虐行為に対する責任が向われるのは当然である。

もちろん、「国体護持」に汲々としていたずらに戦争終結をのぼし、アメリカの対ソ戦略と政治的優位をねらう原爆投下を、みずから招いた日本の軍国主義者たちの責任も向われねばならない。

私は、この歴史的事実と道理を知れば知るほど、戦争犯罪者たちは「仲よく」できるはずはない。この人は、そのことを反米教育と決めつけて、私を非難・中傷しているであろう。

この「老婆心」をひけらかした挑戦的な質状を手にして、私は腹いたが煮えくりかえる思いであった。

広島で育ち、広島で何十年も教師をし、かつまた原爆のにかい経験もあるはずのこの人が、なぜ私に攻撃をかけてくるのか。

同じヒロシマの被爆者として、また教師として、私には悲しく、たえがたい思いが湧きあがってくる。このたえがたい現実、“過ちは再び繰返しません”と誓った

私たちの平和への努力をいしはばもうとする、このかばを破るために、私はしだいに決意をかためていった。

一月の学期はじめ私は、私の苦悩と決意とを、自分のすべての授業で生徒たちに語った。生徒たちはどのクラスでも、私の深い決意を受けとめるように息をつめて聞いてくれた。私以上に怒りをもちやす生徒もいた。

もちろん、生徒でなくても、世の良識ある人々ならば、私の判断の是非を正しく読みとってくれるであろう。人を非難するのむねを得てからや、マニ！

以下は、私のこの決意を支える私自身のヒロシマでの原爆体験である。

## 八月六日。あの日の私

昭和二十年八月六日、この日は私にとって忘れえない日であった。

戦争のまっ最中、昭和二十年七月、私たち母子五人（母、姉二人、弟と私）は父のフリップ

出征にともなうて、それまで住んでいた神戸が危険だからというので、軍人の伯父を頼って母の里、広島県の白島という町にきた。

上の姉は、広島県の安佐郡可部町の奥にある鈴張の寺に、学校から集団疎南に行かされていた。毎日のように、「お母ちゃんのとこに帰りたい」といって手紙を書いていた。

ニオちがいの下の姉は国民学校二年生で、午前中だけ学校には行っていたようだ。ときおり給食で出たジャガイモの丸ゆでやヨモギの団子などを持ち帰っていたが、ある日の食料がエルヤヒヨコの丸だきは味が悪かった。それでも、姉弟で空腹しなげに食べた。

当時はアワビとエビのような穀類の配給しかなく、空腹でひどい毎日であった。しかし、「ぼしがりませに勝つまでは」と、日本の子供たちはみんなそう教えられていた。だからどれも文句はいわなかった。戦争は日に日に激しくなると、疎南先からも母あてに面会の通知がくるようになった。それまでは、親が子に逢いにいくことは禁じられていたし、面会など考えられないことであった。

それほど戦局は悪化し、事態は深刻になっていた。先生としても人の子供を一刻も早く、その子の親もとに引き取ってもらいたかったにちがいない。

母は、姉のとこに、一日も早く行ってやりたい、と思いつながら、連日の空襲のため、なかなか行けずにいた。たとえ行っても、日帰りする規則になっていた。

とにかく、母は八月五日には行くことに決めていた。

それは、その日が日曜日だったからである。ところが、弟が熱を出したために行けなくなった。そして、「明日は何としても行ってやらねば」と決心していたようである。

母は子供づれでは足すまといにならぬので、近所にいた伯母に、「子供たちを預かってほしい」といってひどく叱られた。「二回戦時代に、ひとときでも子供を手当てしてどうするの」とあっさりことわられた。母は、「それなら、下の子だけはつれていきますので、二人をお預かりします。」とこゝろ願ったが、伯母は「私にはとても責任がもたないから、とにかくみんなつれて行きなさい。」と突きはなした。

このようにいきさつがあつて、北入曰、家族そろつて出かけざるをえなくなつた。

六日、北入曰はまったく快晴であつた。

朝はやく姉が、「たけしー、おきんさい。アズキゴ飯す。」といつておこしにきた。「まさか?」とは思つたが、とび起きてガックリした。

コーリヤンがはいつている妻めしだつた。それでも弟と私は、まるで「ヒョクニツク」にでも出かけるかのうたはしゃいでいた。朝、七時ごろ、やっと「警戒警報」が解除になつたのをさいわい、私たちは白島の家を後に鈴張へと向かつた。

この日はめずらしく飛行機の爆音はきこえなかつたが、母は弟を背に、姉と私を両脇にしっかりと抱きかかえ、今でいうならば、アメリカの北爆空に「米」どうバトナム人の母や子の姿とそっくりであつただらう。

母も姉もモンル姿、私の半ズボンには大きなツギがあつていた。

鈴張も向近にきたときのこと、いきなり空が、ピカッと青く光つた。

瞬間、母は「伏せ!」といつて、私たちをさばう防火用水のかげに寝させた。おし「ドカーン」という耳をつんざくような音がした。私は「もうだめだ」と思った。

しかし、何もおちてはこなかつた。しばらくはそのすまじとしていたが、あたりは静かだつた。恐る恐る顔をあげてみると、今来たばかりの広島の高く褐色とも黄色ともつかぬ大きなキノコ雲が山の上にのびあがつていた。

後に知つたわけだが、それがまさに八月六日午前八時十五分、広島に原爆が投下された瞬間であつた。

### 廃墟のわが家へ

せっかく、画会にきて姉をつれて帰ることになつて、いたのに姉一人を残して、母子四人は八月八日広島に帰つてみることにした。

私たちは広島へ歩いていくよりほかなかつた。

三篠から横川に近づくとつれて、やっとたどりつた広島はガレキの山であり、来るときとは似ても似つかぬ姿であつた。

廃墟と化した町並みは、まるで戦場そのものだった。

広い道端に、無惨に焼けこげた人、人、人、真っ黒焦げの裸の死体がズロズロころがっている。　二かいというよりおどろかいた。

わが家までたどりつくのに、まったく手間だった。

「ここがあんたたちの家さ。」と、母は一言いった。

母子は、消滅したわが家の前で茫然と時をすごした。

こうなつては、日が暮れぬ間に上の姉が待っている鈴張に帰るしか行くあてがなかった。　そしてしばらくは鈴張で過ごすことになった。

## 狂い死んだ父

このやうないきさつで、私たち母子五人は原爆から生命の危険だけはまぬがれたが、それ以外は何もかもなくしてしまった。

母子四人は、姉一人を残して九分九厘、白島で死ぬべき運命にあった。

危険を感じた神戸から、安全と思われる広島へわがわが来たことも皮肉なら、広島から鈴張へ行くのに、よりによ、八月六日をえらんだことは、運命のいたずらにしてはできすぎている。

「戦地でお父さんが、きつと守ってくれたんよ。」と、母はいう。

それにしても、もう一時間、白島の家を出遅れていたら、もう一面会を延ばしていたら、いや八月五日に予定通り姉をつれて帰っていたら……、今はいい、たいどうなのだろうか。　母子がいっしょに焼け死んだのならまだしも、母が出

かけたそのあとで、子供だけがつり残され、やけどで全身あかむけになりながら、焼えさかる炎の中を母を求めて、「おかあちゃん、おかあちゃん。」と泣き叫びながら走りまわっているその姿を、私は毎晩、夢に見てうなされた。

八月六日の原爆の日を境に、私の少年時代はたとえようもなくめじめじだった。

頭はフケとミラクモだらけ、ときにはノドから回虫もはきだした。

虫下しのマフニンソウが空腹をみたしてくれたのは皮肉であつた。

こんなにして、泣き泣き生きねば"ならぬか。たことを、私は忘れねば"ならぬのだらうか？

原爆孤児にならぬか。たことは、感謝している。

しかし、この日のことを私はすなおに喜ぶことはできない。

このような恐るべき体験をさせられたことを、私は決して忘れぬ。

「命が助かっただけでもしあわせじゃないか」、「運がよかったんじゃない」と人はいう。しかし、だからといって、私の戦争と原爆への怒りは消えるはずはない。私たちのような生き方をした母子はいないかもしれない、だが、このような体験は、しなければしなくてはすむはずだった。

妻子からひき離れられるように戦場にかりたてられ、マニウで狂い死にしたというモサ父の苦哀を思い、ヒロシマ・ナガサキで焼死し、傷つき、死にたえまじ、た無数の死者たちのことを思い、また戦後三十余年を生きのびてきた自分自身の骨身に刻んだ記憶をすみがえらせるとき、私は怒りに胸がふえる。

### たとえ鎖につながれても

八月六日が、八月九日が、今年もやってくる。

私はしたいに全身が熱くなり、また固くこわばっていくのをおぼえる。

私は自分の教える子どもたちに、何があっても銃だけはとらせたくない。

たとえ監獄につながれようとも戦争に反対する、そんな子供になってほしい。

言うべきことを言わず、見るべきものを見ず、ただ「たれとも仲よく」と、与えられた屈従と破滅への道をひた走りに走らされた、そんな父や母たち、先輩教師たちの暗い行向の時代を再び許さぬために、私はこの証言の記録をしたためておきたい。